

経営コラム 100メートルダッシュで走り続ける

「こんなハイペースで、長丁場の経営というのはできるのだろうか」とみんなが疑問に思っていた時に、私は次のように社員に説きました。

「たとえてみれば、京セラは日本の経営レース、企業マラソンに遅れて加わったようなものだ。スタートは昭和20年(1945年)8月15日、終戦の時に一斉にみんなが走りだした。京セラを創業した昭和34年(1959年)というのは、それから14年経っています。14年を距離にたとえると、ちょうど先頭集団が14キロ地点を走っているということです。その時に京セラはスタートしたのだ。14キロも離されて、42.195キロを走らなければならない。ただでさえも14キロ離されているのに、一流選手でもない選手がチンタラチンタラ走っているのは勝負にもならない。それでは経営をする意味がないかもしれない。だから、とにかく全力疾走で走ってみようではないか。そうすれば、距離が縮まるだろう。もしがんばりすぎだったら、その時には少しペースダウンをしましょう」

そこから十数年で、大阪証券取引所二部に上場になりました。二部上場ということは、14キロ先を走っていたマラソンの第二集団を凌駕する勢いで追いついて視界に捉え、その中に入ってしまったということです。

忘れませんが、その時に滋賀工場のグラウンドに夜、全社員を集めました。松の丸太で櫓を組んで篝火を焚き、二部上場ということがどういう意味を持つのか、みんなに話をしました。(中略)

「皆さんの、この十数年間のご苦労に感謝します。会社をつくった当初から、必死の努力でがんばってきました。人からは『そんなに気遣いみたいに走っても、続くわけがない』と言われながらも、マラソンを全力疾走で走ってきました。確かに皆さんが、『これはがんばりすぎ、働きすぎじゃなからうか』と言った通り、働きすぎでした。その証拠には14キロ前を走っていた第二集団に我々は追いついたので、働きすぎであったに違いありません。しかしここまで来れば、もうすでに我々は習い性となって、少しも疲れていません。残るはマラソンの第一集団、つまり東証一部上場会社だ。次はあの先頭集団に追いつこう」

そう言って、京セラは二部上場から数年で東証一部へと駆け登っていった。一部へ駆け登っていった数年で、ソニーを抜いて、日本一の株価に輝きました。そしてそのあとニューヨーク証券取引所にも上場を果たしました。

つまり、人から「できるわけがない」と言われたことを、私は創業以来やってきたわけです。

1992年8月26日 盛和塾「札幌」開塾式講話より(機関誌116号)

Chapter 3

慎重堅実な経営を行う

消滅していった企業と生き残った企業との違いはどこにあるのでしょうか。私は、それは「土俵の真ん中」で経営をする、つまりは、「慎重堅実な経営を行う」という姿勢があったかどうかだと思います。

— 稲盛 和夫 —

講話のポイント

1. 小心者が場数を踏むことで真の経営者に成長する

真の経営者とは小心者でなければならない。小心者が場数を踏むことで、自分を鍛え、人間性を高め、真の経営者に成長していくのだ。

2. 大胆さと細心さを合わせ持つ

重要な経営判断を迫られたときに、小心さや臆病さだけが前面に出ては、会社の命運を握る経営者としての役割を果たすことはできず、ダイナミックな経営の舵取りもできない。当然ながら、ときには大胆に決断もしなければならない。